

寺
こよみ

十月

一日 お講・板屋
九日 清掃奉仕
十一日 富山・滑川報恩講
十三日 お道具磨き
十六日 お講・三日市
十七日 十七夜お経会

報 恩 講

一九日 午後一時 遠夜
午後七時半 初夜
二〇日 午前七時 晨朝
午前十時 日中
午後一時 満座
布教 川崎順正師

二五日 経田・田家・窪野・柳
沢報恩講
二六日 東狐・青木・報恩講
三〇日 新浜・上下飯野・高島
報恩講
三一日 板屋報恩講

寺 報

善 巧

発 行
〒 938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山 497
白雪山 善 巧 寺
T E L (0765) 65-0055
F A X (0765) 65-0975



善巧寺を支える人々

報 恩 講

十月十九〜二十日

布教 川崎順正師

空 華 忌

十一月四〜五日

講話 高田慈昭先生

越中といえはなつかしい。私の母も富山県城端町の在家の出身で、幼い日、生母に死別し篤信の祖母にそだてられた。二十才で大阪の寺へ嫁ぎ、きびしい姑から田舎者あつかいをされて大変苦労をかさねた。そのころ、利井興隆先生（雪山隆弘師の祖父）のすぐれた法縁にあり有難い念仏者となった。興隆先生のご化導でいままでも仏法といえは死んでからお浄土へ参ることと思ひこんでいたが、今日ただ今、阿弥陀如来の大きなお慈悲にすくわれる平生業成の法義であることを知らされた。それ以来、母は如来とともに生きる力強い信心の生活をめぐまれ、幼児を背負いながら日曜学校を開設し、五人の子供をそだてながら夫（住職）を上げまし、学業と教化に熱意をそそぎ、生涯、ご法義中心の日々を送ったのであった。

おそだて

祖々母の念仏だった。祖々母は毎朝、善徳寺（別院）の晨朝法座に参詣し、朝ごはんのとき、いつも今朝聴聞したご法義を家族に話しかけていたそうである。そんなご縁で母が大阪の寺へむすばれたのだった。

あるお彼岸のころ、祖々母は八十才をすぎて一人で大阪へやってきた。高齢でまわりが心配したが、「何の心配があろうかい。

如来さまといっしよじゃ」といって、敦賀のトンネルの数をかぞえてやってきた。お彼岸は大阪人は多く天王寺さん（四天王寺）を参詣してこつたがえす。祖々母は天王寺の西門に立つて日がくれるまで西の空をおがんでいたという。

「西門で拜んでいるのはオラひとりやった」と。天王寺の西門は西方浄土の東門に向うというお説教をきいていたのであろう。

祖々母のお念仏が母の血にかよい、いま私の血にかよってきたおそだてをしみじみ憶う。その力とは阿弥陀さまのおそだてにほかならない。

大阪慈光寺住職

高田慈昭先生



空華忌講話

行信教講師

山本 攝 先生

(最終回)

私の名前は「攝」これ一文字なんです。今までちゃんと名前を読んでくれた先生はほとんどおられないですよ。大抵「せつ」と呼ばれます。私は平安高校に行っただけですが、その時の西光先生だけ「おさむ」と読んでくれたんです。さすがに真宗のことを学んでいらつしやる方です

から読めるんですね。「おさむ」とる」という意味ですから「おさむ」と読むんです。行信教で、父が観無量寿経の講義の中に、仏さまのお働きのことを説明するのに撰取不捨という言葉が出てくるんですが、ちょうどそこを講義してる時に、私がこの世に生まれてきたんですって。当時若かった高田先生、梯先生が寄って合義の結果、この一文字になったんですって。戸籍上は「攝」一字で「おさむ」と読むんです。私はこの仏さま

の撰取してやまないという願いの中で生まれてきたんです。梯先生が、この子は高僧になる相がある、なんて言って父親をおだてたそう、三男坊の私がいっつのまにやら跡取りになつてしまつていたんです。知らない間に仏さまの光明の中に私が生きておつたんだということが自然に味わえる身にさせてもらったということは、やっぱり名前にも願われておつたのかもしれないね。

この撰取不捨ということは、あらゆるものをそこにありのままと見ていくということなんですよ。ね。仏さまのお悟りの目から見れば、無駄なもの、余計なもの、要らないものというのは世の中には一切有り得ないんです。でも、私の目というのは、もうすでにこれが良いこれが悪いあれが好きやこれが嫌いやという判断の目でものを見ますでしょう。具体的に申しましょう。例えば、御飯を食べるのでも、こどもが自分ですと言ひ出す時期がございますよね。あの時期家の中はひっくり返す汚す

わで大変でしょう。もう仕方がないから、ちっちゃなおにぎりを作りまして置いておきましたら、喜んで自分で食べるんです。もう御飯つぶだらけにしながら食べますでしょう。その時に親なら、ほっぺに付いていたらなんの抵抗もなく口に運んで食べられましたよね。そうして育ててきたはずなんです。自分の恥を言うようなんですけれども、今年私の母は八十になります。何年か前から三叉神経痛という病気になるまして、あれは顔がものすごく痛むんです。ある神経痛の専門の先生が、その痛みのある神経を直接止めてしまふという処置をして下さった。けれども二つ良いことはございまして、神経の痛みを止めるためにちよつとこの辺が麻痺してしまふんですよ。赤ちゃんと同じなんです、こぼしたりこの辺につけたりしてるんですよ。私が自分の恥だと言うのはそこなんです。我が子のかわいい頃だったらはっぺからとつてあげて食べてあげたけど、おばあちゃんに同じことを出来るかっていつたら出来ないんですよ。こんな身近にいるはずの家族でさえももう私の目はちゃんと区別してしか見てないんです。

実は親鸞聖人があの歎異抄の第五条のところでおっしゃった「親鸞は父母の孝養のためにとて一遍にても念仏申したることいまだそうらわず」という有名な言葉がございますね。あの中で親鸞聖人がおっしゃったことは、一番身近にいるはずの者でさえもこの私は自分の我欲の目で見ることができんじやないかと。そしてその歎異抄の第五条の一番最後は、「急ぎ浄土の悟りを開きなばまず有縁を度すべきなり」と結んでいかれる。私が仏さまの本願力によって本当のお悟りを開いたならばまず第一に自分の有縁の者、自分の一番身近にいる者を救いたいよと親鸞聖人は言っているらしいんですよ。これではもう自分としてはなんとしても仏さまの世界にただの一步でも近付くことができんという中で、悩んで悩んで出会つていかれたのが本願他力の念仏、他力の信心という道であつたわけでございます。ですから、他力というのは決して自力の反対の言葉じゃないんです。自分には他力しかないんです。だからそれが唯一の白道だったんです。この道を歩んでいくしかなかったんです。今あなたがそこにいるその

まを私は見つめていくぞ、今あなたがそこにいるそのまを私は限り無く受け止めていくぞ、その姿にどうせよという条件は一切つけないぞ、今あなたがそこにあるそのまを無上の価値あるものとしてわたしは見つめておるんだぞという仏さまのお言葉に出会つた時に、その撰取不捨の働きが自分に届いたんだと受け止めていかれたんです。そうすると、この信心というのは私が定めた信ならばゆらぐことがあつたかもしれんけれども、仏さまの撰取不捨の働きが私の上にいき届いたところを信心というのであるから、それはどんなことであつても一切ゆるれることのない金剛の信心であつたと親鸞聖人は受けとめていかれたんです。

乱暴かもしれませんが、私は他力の信心ということ、仏さまからいつも思い続けられておること、とよく説明するんです。そうすると私にとって他力の信をいただくということは、「はい」ということだけなんです。そしてそれを言葉に表したのが「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」という私の口からでてるお称名であつたわけなんです。私の口からでるお念仏であつたけれども、一切の計らいを加

お講

善巧寺がはじまって以来五百年、勤めつづけられてきたお講。各地のお講の皆さんのお顔とおときをご紹介します。

今回は四月一日から八月一日まで計九回のお講のみなさんです。こうして一堂に会するとなかなか壮観ですね。

八月十六日、九月一日、十六日はお講はお休みです。



四月十六日 栗虫お講

何といっ
ても出席率
は栗虫が一
番。
この賑わ
いを見て下
さい。
油揚げ・
人参・き
大根の煮物
には車麴が
入っていま
した。



五月十六日 音沢お講(2)

まめなか？
まめじゃが！
大きな声で語
尾の上る音沢弁
がなんともいえ
ないふんいきを
かもしだします。
音沢名物の山
菜も最近取りに
行く人が少なく
なりました。
ざんねんです
ね。



四月一日 下村お講

少ない人数でいっしょうけんめい。下村がなつて。煮物にはご自慢の下村小芋、ごぼうがダイナミックに大きいこと。人参大根の白あえの他に、野菜のこうじあえがはじめてお目見え。



六月一日 東狐・上野 お講

昔から何故か音沢の間に入善町が一回入っています。
煮物は厚揚げや人参のほかにキャベツ、車麴が入って、吸物はおしょうゆ味でした。





七月一日
音沢お講(4)



音沢お講
最終日。
煮ものは、
油揚げ、ふ
き、こんにゃ
く、菰、人
参、昆布。
酢のものは
きぬぎし、
そして豆腐
のみそ汁で
した。



五月一日
音沢お講(1)



音沢地区は九十
軒余りある地区で
すから、四班に別
れて、四回のお講
ぶとめをします。
五月初旬は山菜
にはまだ早く、ほ
うれん草が代りに
なっています。



七月十六日
中陣お講



中陣は昔
から「じゃ
がらお講」
で有名。百
人分のじゃ
が芋を煮る
様子は圧巻
です。
すまし汁
にみつ葉が
品よく浮ん
でいました。



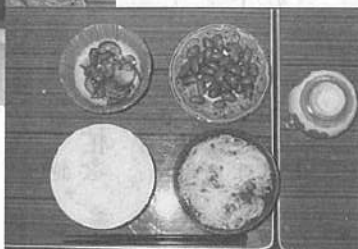
六月十六日
音沢お講(3)



できました！よし菜の
酢のもの。細かく切つ
て、味つけには味噌が
少し入っていて。この
味はやっぱり音沢でな
ければ出せない味で
す。



八月一日
石田・生地
中新お講



三地域合
同のお講は
これ又「そ
うめんお講」
で有名。煮
豆と酢のも
のがついて、
おそうめん
はおかわり
あり。
おかわり
三杯目とい
う人も。

素顔でこんにちは

善巧寺

雪山玲子さん



若い頃、悲観論者だった私が主人と出逢って、心から言葉を交わし合う喜びを教わり「逢えてよかったね」と言い合えたこと。それと、前向きに生きる喜びをみつねながら生きていくという喜び、仏陀のメッセージ通りにまた逢える世界に私たちはいる、というおおもとの喜びを教えてもらったことは、私にとって最高の、何よりのプレゼントでした。生き方が変わるというか、人間として本当に人間らしい生活をさせてもらうきっかけを彼がくれました。

ことばの教室「雪ん子劇団」を作ったのは『生きた言葉を交わし合う喜び』『表現力豊かな人間・心豊かな人間』、そういうものを子供たちと一緒に考えよう、というのがきっかけです。

舞台上立つと、どの子もみんなきらきら輝きますね。舞台は、みんな輝いてるね、それぞれに大事な命だねって確かめ合う場もあるんです。子供たちも、それ感じてると思いますよ。そういう、子供たちとお寺の関わりってとっても大事だと思いますね。よくお寺は年とってかたっておっしゃるけど、遅いのよ年とってからじゃ(笑)。

長男はこれをお寺を継いで「雪ん子劇団」も続けていきたいという希望をふくらませています。子供たち三人、力を合わせていい仕事をしてくれるだろうなと思っていますよ。

『寺と生活』七月号、一部省略

「最後まで表現し続けた人でした。痛いもあり難いも百パーセントです。迫ってくる死を確認していたのは主人。『ひよつとして』と事実を事実として受けとめられなかったのは、私たちかも知れません」と、ガンに倒れ「ちよつと先に往くだけだよ」と往生された夫・隆弘師を語る。

「初めて出逢った時、もつとこの人と一緒に居たいと思ったの」、長女としての義務感で継ぐつもりだったお寺。「彼は『こんなステキな世界にいるのだよ』と、ブツデイス(仏教者)としての生活をベールを一枚ずつ剥ぐように教えてくれました。お慈悲の心を頂き向こう側を支えに考える心をもった人ですね。阿弥陀さまの存在が感じられる人でした」

東京で五年間ジャーナリストの妻の生活をし、二人目の子供が産まれるのを機縁に富山に帰り、寺での活動を始めた。大阪生まれで開放的な隆弘師が善巧寺日曜学校を開き、何かもつと一人ひとりと触れ合い、子供たちのいい個性が引き出せないものかと思案。小さな頃から児童劇団に入り『劇団四季』で活躍していた経験から、「やろうか」「やろうよ」と、演劇好きでアナ

今月の顔 ⑨

す。人生は長い短いではないと思うの。主人の伝えてくれた素晴らしいものを子供たちにどう伝えていくかってことね」と、大きな瞳がクルツと動き、優しくうなづく。

「彼がね、誕生日に色いっぱいのスイトピーを四十八本くれたの。すてきでしょう」と、うれしいプレゼントを楽しそうに語る。

「とりどりのスイトピーは歳の数」^⑩
春の訪れを告げるスイトピー、北国の冬は長

ウンサーの経験もある玲子さんも大賛成して『雪ん子劇団』・ことばの教室が誕生した。

めずらしさ、おもしろさで子供たちが集まってきた。訓練によって自分の思いを人前で表現できるようになる。言葉を通じて伝わるもの大切さを学ぶ。皆がニコニコと笑顔で喜びに浸っている雰囲気、その喜びが演劇を通して「心の学び」となり『雪ん子』という一つの家族となっていく。

そして十五年、育った卒業生から自主的に結成した『雪ん子シニア』も交えて、この夏には十五周年記念公演を予定している。

「寺に集まって共に歩む、生きる実感を味わってくれたら。私たち夫婦ができる大切なお寺の活動の一つだったのです」と微笑む。今も常に二人で考え行動し、共に生かされる姿が伝わってくる。お得意も受け、法衣を身に付けて過ごす時間も多い。法務も含めてより一層多忙な日々となっている。

「一つの悲しいこと、苦しいことを頂き、苦しみは逃れられないもの、受けとめてこそ人の苦しみがわかるところに置いて下さる如来さまを身近に感じさせて頂いています。すごい力で

雪山玲子師

い。

「生きているうちは生きていく」と、今を大切に精一杯楽しみながら、生きたお寺とは問いかけて、力強く着実に歩まれる姿に感動を覚え、教えられることの多いひとときを過ごした。

インタビュー・写真 北原 光

〔信仰〕六月号より

●若人の集い「ウツラバーナ」
—あみださまの光にてらされて
ゆく— ろうそくの光の中で仏
教讃歌を歌い、法話に耳を傾け
る若人たち。わがいのちを見つ
め人生のよりどころに目をひら
いてゆくことでしよう。

●盆会
総代さん方が十数人参詣。本堂
でおつとめ、若院の法話のあと、
空華殿でお酒をくみかわしなが
ら歓談しました。お寺の運営な
どについても活発な意見がとび
かいました。

今年の夏は祠堂経に始まり、
お講、盆会、青年盆会、盆おど
り、雪ん子とフル回転だった。
15周年を迎える雪ん子には、
山口や福井からも観劇に來られ
大成功に終えた。京都の私の親
友もかけつけてくれて、そのま
ま数日間滞在して青年盆会など
の行事にも参加してくれた。彼
とは高校時代からのつきあいで、
今は美容師の学校に行っている。
仲間で遊びに行く時、必ず最初
にはじけてしまうのが彼で、「な
んでそんなアホやの」と皆でよ
く言っていたが、内心うらやま
しくも思っていた。そんな彼が
以前こんなことを言っていた。
「いのちってなんやねん。宇宙
の長い歴史から見たらオレ達の
人生なんてほんの一瞬やろ。一

●ことも盆踊り
日校OBと小ぢやな子が手を
つないで踊る様子は何ともほ
えましい光景です。



体そこに何の意味があんねん。
一生懸命がんばって、金ためて
名誉や地位を手に入れたところ
で、どうせいつかは死ぬ。生き
るって一体なんやねん。」
これを聞いた時、
驚きと同時に、あ
る意味ですごいと
思った。悲観的
ではあっても彼は自
分のいのちを真剣
に見つめていた。
そんな思いをもつ
た彼が、阪神大震
災をきっかけに心
の動きがあったと、
今回話してくれた。震災の時に
彼は滋賀にいた。震度は兵庫や
大阪より弱いものの、初めての
大地震の体験で死を感じたそう



だ。地震のせいでちらばった部
屋をかたづけている時に一枚の
色紙が目がいったと言う。その
色紙は以前、富山に遊びに來た
時にうちからプレゼントしたも
ので、こう書かれて
いる。「生きとる間
は生きとるぞ」この
言葉に彼はひどく感
動した。
そして震災前に、人
間関係のいざこざで、
うやむやのまま、会
えなくなってしまう
た親友に、震災のあつ
たその日に会いに行っ
た。「後悔したくなかった」と
彼は言う。そしてこう言った。
「いつ死ぬかわからん、て気持
ちで生きていけたらすごいで。

秋晴れや
敬老の日の お強飯
秋晴れや
老父に贈る 吾赤紅
俊之



国府教区仏婦の方々来院

でもあかんなあ。あの時の気持
ち少しづつ忘れてくわ。」
「いのちって何」「生きるっ
てどういうこと」「死んだらど
うなるの」という一番大切な問
題を親にも先生にも相談できな
い、相談しても答がかえってこ
ない。これが今の日本の現状だ
とある先生が言っていた。なる
ほどなあと思う。いろんな宗教
がはやるのもそんなことからな
のかもしれない。
こういう話をしながら、テレ
ビなんかじゃ味わえない、生の
人間同士が輝きあうことを感じ
られるのが本来の寺であらう。
お寺の会館に集ってくるみんな
などそんな話に花が咲いて、夜
のふけるのも忘れる日の多い素
敵な夏であった。

寺
こよみ

十一月

一日 お講・愛本新

四日 午前おけそくもみ

善巧寺門信徒ゴルフコ
ンペ

空華忌

四日 午後七時半 初夜

五日 午前七時 晨朝

午前十時 日中

午後一時 満座

講話 高田慈昭先生

七日	上野報恩講	七日	中陣報恩講
一三日	出報恩講	一八日	析沢報恩講
一四日	魚津報恩講	二二日	石田報恩講
一五日	中新報恩講	二四日	浦山新報恩講
一六日	お講・浦山新	二八日	
一七日	十七夜お経会	二九日	
一八日	音沢報恩講		
二二日	雪ん子劇団チャリティ		
二三日	もちつき		
三〇日	除夜会		
三一日			

寺
こよみ

十二月

報 恩 講

十月十九日午後一時 速夜
 午後七時半 初夜
 二十日午前七時 晨朝
 午前十時 日中
 午後一時 満座
 発願寺若院
 川崎順正師
 布教

善巧寺の報恩講が近づいてまいりました。十月十九、二十日どうぞおさそい合わせの上お参りください。「ほんこさま」は私達の親鸞聖人のご法事です。浄土真宗の門徒にとって重要なご法要。何よりも大切に。

空 華 忌

十一月四日午後七時半 初夜
 五日午前七時 晨朝
 午前十時 日中
 午後一時 満座
 大阪慈光寺住職
 高田慈昭先生
 講話

善巧寺にとって忘れてならない方、明教院僧錯さまのご法事です。ブラジルからお帰りになったばかりの高田慈昭先生にご講話いただきます。五日はお弁当も準備しますからごゆっくりおまいりください。

善巧寺門信徒ゴルフコンペ

十一月四日(土)
 午前八時二十分スタート
 (八月二十六日オープンの桐山カントリー)
 午後二時 高田杯表彰式
 午後七時半 空華忌お初夜
 高田先生ご講話
 高田先生を囲む会
 門徒会館
 参加は善巧寺門信徒の皆さん
 会費 四千元(プレー料金別)
 お申込みはお早目に照行寺(神子さん)まで六五一〇一二

四年間ブラジル開教総長をされた高田先生、平成元年以来六年ぶりのご出講です。隆弘とお酒をくみ交しながら「一度、高田杯コンペをしましょうよ」「ええですなあ是非」こんな会話が度々あったのですが、この度ようやく実現します。日頃忙しくてお寺との縁の薄いゴルフ通の門徒さん、あったかい高田先生のお人柄にふれて、おみのりのご縁を結んでいただければ幸いです。

報恩講・空華忌お待ち受けご奉仕おねがい

一〇月 九日 清掃
 一三日 お道具磨き
 一八日 おけそくもみ
 十一月 四日 おけそくもみ

法灯をともしましょう

お米の御進納は玄米で

勿体ないことですが、祠堂会ごろからお米がだぶついて保存に苦労しています。これからお米で御進納くださる場合は玄米のままで、量も少な目をお願いいたします。

門徒報恩講十月十一日から

今年も「ほんこさん」の時期がまいりました。年に一度のおとりこし報恩講、どうぞご家族揃ってお仏壇の前に座ってください。昔はお嫁に行った娘さんもこの日の為にお里帰りをしたとか。赤いろうそくの準備はできましたか。善巧寺報恩講におまいりなされた方にはさし上げます。お仏壇のおそうじはいつもより念入りに。阿弥陀様(または、お名号)をまん中にして向って右に親鸞聖人(十字名号)左に蓮如上人(九字名号)それ以外のものはこの際とりはずしましょう。水子供養や安全祈願のおふだなどわけのわからないものがあつては阿弥陀さまに失礼です。ご信心のみぞさらえ、どうかすっきりと浄土真宗のお仏壇のお荘厳を。それからおさい銭やお茶の用意を気になさるより、一緒に正信偈を読んでください。心ずかに法話を耳を傾けてください。善巧寺、法輪寺、照行寺、三人でまいります。

あなたのお名前を本願寺の瓦に刻んで後世に伝える

本山では平成十年に勤修される「蓮如上人五百回遠忌」を控えて、皆さま方から浄財をおねがいしています。お扱い(記念品)にはいろいろありますが、今回は「御影堂瓦記名扱い」をご紹介します。一万円あたりのご進納で一名の芳名(氏名または法名)を、ご影堂ご修復の際に屋根に葺かれる瓦に記名して後世に伝えさせていただきます。お申込みはお早目にお寺まで。

合 掌

雪ん子劇団の十五年の歩みをたどっていますと、よくまあこれだけいろんなことをやってきたことだと感心してしまいます。と同時に、何となくさんの方々に支えられてきたことかと胸があつくなります。

右も左もわからなかった一年生の顔が目がもうがつてきました。みなさんに見守られて、ほんと、いい顔にならせてもらうんですね。

会館で夜おそくまでだべっている若者たちも、結構いい会話をしている様子、若院雑感を読んであつたかくなりました。

隆弘の新聞社時代の上司のお祝いの会に招かれて上京しました。たった五年の東京生活でしたのに、皆さんの心の中に隆弘が残っていました。女房冥利に尽きます。

いよいよ今年もほんこさんシーズン。時間の余裕のあるべき時にちよつと忙しくすぎたので年と体のことも考えて自重しながら、みなさんとお出合いを大切にさせていただきます。

